

村田純一・佐々木正人・河野哲也・染谷昌義（編）  
『知の生態学的転回 1』  
—身体：環境とのエンカウンター—

東京大学出版会 2013年6月 A5判 283頁 ¥3780(税込)

石本啓一郎

身体は常に動く。私たちは地上を移動し、物をつかみ、リズムを刻み、声を出す。身体内では常に神経細胞が発火し、筋が収縮し、血液が循環し続け、たとえ同じ姿勢を持続させているように見えたとしても、厳密には身体の重心は揺れ続ける。その動きはランダムに起こるのではなく、環境とともにある種のまとまりをもつ。

編者の佐々木正人氏は、本書における身体の語り方を次の2点で特徴づけている。第一に、本書は、司令機構としての脳を代表とする身体ではなく、手足や脳などを含む全身の様々な器官が協調する身体を捉えようとする。第二に、従来の心理学や生理学で考えられてきたような各感覚神経に対応した要素的な「刺激」として環境を捉えるのではなく、その身体にとって有意義な「情報」に満ちた環境を捉えようとする。本書の各章は、これら2点に特徴づけられる語り方で、身体と環境を切り離すことなく、身体と環境の関係と、その関係の変化（発達）を多様な観点から描いている。

本書は全3部から構成される。第Ⅰ部「発達と身体システム」では身体と環境の関係に生じる変化に切り込み、第Ⅱ部「生態学的情報の探求」では、身体の周囲にある環境上の「情報」に焦点があてられる。第Ⅲ部「生態心理学の哲学的源流と展開」では、身体と環境に関わる哲学的問題が議論される。

身体と環境の間の関係を考える上で非常に重要な現象の一つは「発達」である。本書で示される「発達」は、身体と環境を別々に描くものではない。たとえば「氏か育ちか」という問題は、身体と環境を切り離し、発達の結果とそれを引き起こす要因を特定しようとするときに立ち上がる問題である。個体発達過程そのものを捉えようとするとき、

その両者の区別はむしろ妨げとなる。「発達」の過程で起きていることは、個体がもともともっていた能力が発現するだけでも、環境から与えられたものが個体に入力されるだけでもない。個体は常に環境と切り結び（encounter）、その過程がまた次の環境との切り結びを生む。個体と環境との絶え間ない切り結びの過程が個体発達過程を形成しているという事実は、「氏か育ちか」の問題においてある結果を引き起こす要因が二つのどちらか特定しようとすることで、見逃されてしまう。本書で示される「発達」とは、こうした身体と環境の切り結びの動的な過程を意味する。

この意味での「発達」の過程は、従来、発達に関わる心理学において主要な問題として扱われてこなかったようだ。何故だろうか？ 本書で示される批判の一つは、心理学が人の発達の過程を「心的表象」の変化として捉えてきたという点にある。こうした捉え方では、身体と環境を二分し、個体がもっている「表象」あるいは「知識」の変化のみが、個体発達過程であるとみなされる。それでは発達過程で起きている個体と環境の絶え間ない切り結びという事実が隠されてしまう。

環境と身体の切り結びの変化を捉える視点に立ったとき、個体発達過程はどのように見えてくるのか。たとえば、赤ちゃんが「立つ」という出来事はどのように見えるのだろうか？ 一般的に「生まれつき」とされる生物の行動傾向はどのような環境との切り結びの過程なのか？ 各章の「発達」に切り込む視点は示唆に富むものである。

私たちはいつも環境との出会いの過程を生きている。しかし、編者が述べるように、身体と環境の関係やその関係の変化をすべて記述することは不可能である。本書は、その困難を伴いながらも、各章の執筆者たちが身体と環境の柔軟な関係を十分に描き出している良書である。この種の探究の面白さは、日常的に「誰もがやっていること」や、「誰もが目にしていないこと」を改めて学びなおすところにあるだろう。身体の「学びなおし」は、私たち自身の身体と環境との関係を変え、日常の新たな可能性をひらく機会であると強く思う。